

[学会報告]

ICCEES 参加記

ヨフコバ四位 エレオノラ

国際中欧・東欧研究協議会 (ICCEES) の第9回世界大会が2015年8月3日から8日まで神田外語大学で行われ、アジアで初めての大会となりました。大会には50以上の国々から1500名近くの研究者が参加し、中欧・東欧から中国までの幅広い地域に及ぶ政治、経済、国際関係、歴史、社会、文学、芸術、言語、宗教など、あらゆる専門分野にわたっての最新の研究成果を発表し、討議しました。公用語は露語、英語、仏語、独語の4言語でした。発表にはパネルとラウンドテーブルの2種類がありました。パネルは、数人(3-4人)の発表者に司会と討論者を含めた形式で行われました。また、パネルには2か国以上からの参加者が義務づけられており、パネルでの発表は統一的概念のもとに企画されたテーマについて行われました。一方、ラウンドテーブルは、特定のテーマについて複数の専門家が自由な形式で話し合うという形で行われました。パネルおよびラウンドテーブルは、いずれもひとつのセッションにつき、1時間半の時間が与えられていました。

大会への参加にあたって、3か国(日本、セルビア、ブルガリア)からの4人の研究者でパネルを組み、発表することを決めました。また、司会を神奈川大学の堤正典先生に、討論者を東京大学の三谷恵子先生にお願いしました。堤先生も三谷先生も快く引き受けてくださいました。この場を借りて、お礼を申し上げたいと思います。

また、大会への参加にあたって、日本スラヴ学研究会から参加費の一部の助成を受けました。助成を受けたことに関してもお礼を申し上げたいと思います。

パネルのメンバーの4人とも南スラヴ語を対象としている研究を行っているので、大会への参加にあたって、それぞれの研究テーマを生かした発表を企画しました。パネルのトピックには“Exploring Various Perspectives on the Study of South Slavic Verbs”というテーマを選びました。それぞれの発表テーマおよび発表者は次のとおりでした：

- ① Verbs of Oscillation in South Slavic: A Case Study in Lexical Typology (岡野要、京都大学)
- ② Clitic Doubling of Objects in the Bulgarian Northeastern Dialects in Romania (菅井健太、東京外国語大学)

- ③ Combinations of Nouns in Accusative Case and Verbs in the Serbian Language —
With a Focus on Sematic Groups Expressing Exertion of an Influence on Objects and
Exertion of an Influence on People (Sanja Joka、東京外国語大学)
- ④ Imperfectivity and Evidentiality in Bulgarian (ヨフコバ四位エレオノラ、東京大
学)

今回の大会には言語学に関する発表はきわめて少なかったのですが、本パネルに興味を示してくれた研究者は多数おり、活発な議論が行われるセッションとなりました。4人の発表者は、岡野、菅井、ヨフコバ四位、ジョカ（敬称略）の順に、15分ずつ、パワーポイントを使用しそれぞれのテーマについて発表しました。その後、それぞれの発表者はオーディエンスからの質問に答えました。最後に、対論者の三谷先生からそれぞれの発表の内容や今後の展望についてコメントをいただきました。

ヨフコバ四位は、Imperfectivity and Evidentiality in Bulgarian（ブルガリア語における不完了性と証拠性）というトピックで、ブルガリア語の証拠性の形式（いわゆる-*l*分詞）とアスペクトの関係について取り上げました。ブルガリア語の証拠性については、今まで様々な観点から研究がなされてきていますが、分詞のアスペクトの特徴との観点から行われた研究はありません。本発表では、証拠性の形式の機能の分布を分詞のアスペクト的特徴と関連付け、分類しました。

ブルガリア語の-*l*分詞には非モーダルな働き（不定過去、完了）とモーダルな働き（推量、伝聞、驚嘆など）があります。これまでの研究ではこれらの働きの分類が体系的に行われておらず、また双タイプの働きを特徴づける意味要素の特定に特化している研究はほとんどありません。本研究では、-*l*分詞のモーダルな働きと非モーダルな働きの区別には分詞のアスペクト的特徴が重要な役割をはたしているという結論に至りました。より厳密に言えば、完了性という意味特徴を含んでいる形式は、-*l*分詞の原型の意味（テンス・アスペクト）を保持しながら、新たにモーダルな働きを獲得しています。一方では、不完了性という意味特徴を含んでいる形式はモダリティドメインのみでの働きを担っています。

発表者は、これまでの研究でも、分詞のアスペクト性に触れてきましたが、これまでの研究で主に考察してきたアスペクト性は、いわゆる Aorist / Imperfect の対立に基づく特徴（Aorist -*l*分詞 / Imperfect -*l*分詞）です。ICCEES の大会での発表では、Aorist / Imperfect のアスペクト的特徴に加え、スラヴ諸語特有の完了 / 不完了という意味特徴にも着目し、ほかのスラヴ語と違い、ブルガリア語では可能である完了体の Aorist -*l*分詞、不完了体の Aorist -*l*分詞、完了体の Imperfect -*l*分詞、不完了体の Imperfect -*l*分詞の4種類の-*l*分詞の機能の分布について探りました。

今回の発表は、証拠性とアスペクトの関係をめぐる研究の第一歩となり、多くの課

題も残しましたが、大会での発表の際に頂いたコメントをもとに、このテーマについてより深く掘り下げ、研究を拡大していきたいと考えています。そういった意味では、ICCEES への参加は極めて貴重な経験となりました。

ICCEES への参加は違う意味でも貴重な経験となりました。一つは、同じパネルに参加したほかの研究者の研究についてより深く知ることができ、また、自分の研究の位置づけを認識することができました。さらに、一週間近くにわたり行われた今回の大会では 400 近くのパネルとラウンドテーブルが開催されたので、中欧・東欧から中国までの幅広い地域に及ぶ政治、経済、国際関係、歴史、社会、文学、芸術、言語、宗教など、様々な分野の最前線の研究について豊かな情報も得ることができました。

ICCEES の大会にはパネルやラウンドテーブル以外に、著名なゲストを招いての特別企画も複数開催されました。また、書籍展示も大変充実していました。

ICCEES の大会は、5 年に一度しか開かれぬ貴重な大会です。このような貴重な大会で発表ができ、また様々な分野の研究者から自分の研究について意見をいただくことができたことには、大変大きな喜びを感じています。この貴重な経験が実現可能となったのは、日スラヴからの助成があったからこそだと思います。この貴重な経験を今後の研究のために積極的に生かしていきたいと思っています。

今回の大会には 1500 人近くの参加者がいましたが、組織委員会の素晴らしい準備



(撮影) 堤正典

や大会中の素早い対応のおかげで、大会は成功をおさめ、無事閉幕しました。大会には地域からの住民や神田外語大学からの学生などの大勢のボランティアも参加し、会場の外での交通案内から会場の中での様々な案内や手続きの手伝いまでしてくれました。今回の大会はどの参加者にとっても貴重な経験になったに違いないと思います。